

「平成24年12月16日投開票の衆議院議員選挙」で 投票する前に、日本国民（有権者）が知っておくべき 政治学の常識（第2回、「フェミニズム」の禍毒）

「国民が品性を維持しようとしないとすれば、その国家は滅亡寸前へと近づく。

国民が、誠実、正直、清廉、正義の美德を貴び実行することをしないとすれば、そのような国家は生存する価値を失う。

富が国民を腐敗に至らしめ快樂は国民を頹廢させ、国民全体が名誉、秩序、従順、貞節および忠誠の美德は過去の遺物にすぎないと思うとき、**国家は死にいたる。**

この救済の方法はただ一つ、各国民の品性の回復しかない」

（以上、サミュエル・スマイルズ『品性論』、第一章から）

フェミニズムの本性は、極めて危険！

ジェンダー、セクシュアリティ、ジェンダー・フリーなどの空体語・虚構論理に基づく、

男女混合名簿、男女混合組体操、男女混合騎馬戦、男女同室の着替え、男女同部屋の宿泊、子供の性の自己決定権の推奨、男らしさ／女らしさ（＝性差）を男女差別などと転倒する悪徳教育・・・

などは「法律改正して廃止する！」、「抜本的に見直す！」、「悪徳の行政主体である内閣府男女共同参画局を廃止する！」と訴える正しい道德観を持つ政党に総選挙では投票しましょう。

それが、日本国のすべての子供たちの人格育成のために果たすべき、我々大人の責任ではないでしょうか？

総選挙の投票前に、**フェミニズムとポスト・モダン思想の融合型フェミニズム（第三期フェミニズム）**に基礎を置く「**ジェンダー・フリー教育**」についての知識を学んでおきましょう。

I 教育を救う保守主義の哲学

☆☆☆ 教育を救う保守主義の哲学の叡智 ☆☆☆

① フェミニズムと男女共同参画基本法にかんする基礎知識

【中川八洋『与謝野晶子に学ぶ「幸福になる女性とジェンダーの拒絶」』、グラフ社から】

日本では「土建屋」田中角栄が首相になって、国民あげて「列島改造」のバブルに躍り出した頃の1972年、のち日本の社会を解体的に腐食することになる、とんでもない仮説が、二つ地球上に現れた。

一つは、英国の社会学者アン・オークレーの著『セックス、ジェンダー、社会』である。

もう一つがジョンス・ホプキンス大学医学大学院の、半陰陽を専門とする心理学者ジョン・マネーの『男と女、少年と少女』である。

性差を意味する新しい用語「ジェンダー (gender)」は、この両者を発祥とする。

この二人の1992年の仮説は、それから20年を経た1990年代に入って、日本列島を支配する「赤い炎を吐く巨大怪獣」のような「日本版フェミニズム」運動へと成長した。

オークレーとマネーの仮説は、それぞれの系譜を経て、「メイド・イン・ジャパン」の性秩序や男女の人格を破壊する独創的なドグマを生み出したからである。

オークレーの「ジェンダー」をマルクス主義に化合させた一人が仏のC・デルフィである。

このデルフィの1989年の来日講演にヒントを得て創られたのが、「ジェンダー・フリー社会への革命」を柔らかに表現し直した“男女共同参画社会”である。

その中心人物が極左ゲバ学生出身の大澤真理（東大教授）であった。

そして大澤らがこの新・革命戦術を共同謀議したアジトが「国立婦人教育会館」であった。

1994年に総理府に設置された男女共同参画審議会とは、これらの地下活動をしていたフェミニストたちが表に出てきて、日本の伝統と慣習を破壊する非暴力革命を国家権力によって“合法化”する公然組織であった。

実際に、この審議会から答申『男女共同参画ビジョン---21世紀の新たな価値

の創造』が出され、「ジェンダー・フリー社会への革命」が政府の政策となった。1996年7月であった。

しかもこれが、3年を経て、1999年6月には、男女共同参画社会基本法となった。

レーニンの1917年11月の暴力革命に匹敵する「世紀の（社会主義・共産主義）革命」が、この日本においては無血で成功したのである。

しかし、日本国民の多くが、この男女共同参画社会基本法の恐ろしさを知って戦慄する日は、おそらくあと十年（ちなみに著書の発刊は平成17年、2005年である）かかるだろう。

（以上、中川八洋『与謝野晶子に学ぶ「幸福になる女性とジェンダーの拒絶』』、グラフ社163～164頁、（ ）内：著者、（ ）内：私（＝ブログ作成者）の補足）

② 心理学者マナーの「ジェンダー」、日本の原産の妄語「ジェンダー・フリー」とは何かを知る。

マナーから提唱された、もう一つの「ジェンダー」のほうは、東京都が全額出した東京女性財団において、日本の子供的人格から男性性と女性性を破壊して異常人格者にする目的の「ジェンダー・フリー教育」の理論（狂気？）として結実した。

このグループは、マナーの「ジェンダー」をマルクス・レーニン主義の人格改造ドクトリンと合体させた。

その成果がこの財団が1995年に発行したブックレット『GENDER FREE』である。

これはその後、ジェンダー・フリー教育の“聖書”となった。

つまり、男女共同参画社会基本法のほうの「ジェンダー・フリー」は、「ジェンダー（性差）」を意図的に“性差（性別）秩序”と曲訳しておいて、「性別秩序が破壊された社会」のことをユートピアと妄想しつつ、それを意味不明な新語「男女共同参画社会」と名付け、社会解体を推進するカルト宗教のことである。

一方、「ジェンダー・フリー教育」のほうは、人間の「ジェンダー（性差）」は生まれた後にその性器に無関係に選択できるという狂気を信仰する者が、子供たちに向かってそれを強制的に実験していくカルト宗教である。

（以上、中川八洋『与謝野晶子に学ぶ「幸福になる女性とジェンダーの拒絶』』、グラフ社165～166頁、（ ）内：著者、（ ）内：私（＝ブログ作成者）の補足）

③ J・マナーによるジェンダー・アイデンティティーの症例についての虚偽

報告書『性の署名』を知る。

マネーが、社会的・文化的に性差は形成しうるという仮説を提示し、よってこの性差を「セックス (sex)」とせず「ジェンダー (gender)」としたが、この仮説の「証拠 (症例)」は一つしかなく、マネーの著『性の署名』にも記述されている。邦訳 (人文書院) の 111~118 頁がそれである。

(この症例の経過は、ジョン・コラピント著『ブレンダと呼ばれた少年』に詳しい)

・・・しかし、これはマネー作の「小説」であった。

(要旨：半陰陽ではない完全な男性として生まれたが、生後 7 か月の時、医療事故でペニスを失い、生後 21 か月の時、マネーの両親へのアドバイスから、睾丸と陰嚢を切除して女の子に性転換し、その後、両親に女の子として育てられた「ブレンダ」は女性として成長した、すなわち男女の性差は後天的に創りうる (= 育て方次第である) ことが証明された、とするマネーの虚偽報告のこと)

要するに、「ブレンダ」が 6 歳の 1971 年、すでにマネー仮説を裏付ける「証拠」はなかった。

しかし、マネーは 1972 年、「証拠」がないのを知りつつ「Gender Identity (性自認)」なる新概念をもって、自分の“でたらめ仮説”をセンセーショナルに発表した。

それが、日本の過激フェミニスト好みの“真赤な作り話” --- 「性差は、社会が強制し、幼児が自己決定すれば定まる --- であった。

「性自認は先天的なものと考えられていた。しかし、そうではない。・・・人間の性自認も社会からの刺激がなくては男性あるいは女性として分化できない」
(マネー 『性の署名』)

「性 (ジェンダー) に対する生まれつきの傾向と、出生後の数年間にもたらされた性 (ジェンダー) に関する合図との間の相互作用が、自分自身を男性あるいは女性としてはっきり認識できるようにする。・・・その時点で、自ら認められた性 (ジェンダー) が本来の性 (native gender) となり、・・・いつまでも残り続ける」 (マネー 『性の署名』)

「性自認・役割は、話し言葉を習得するのとほとんど同じ方法で習得される」

(マネー『性の署名』)

(以上、中川八洋『与謝野晶子に学ぶ「幸福になる女性とジェンダーの拒絶』、グラフ社 171~174 頁、() 内: 著者、() 内: 私 (= ブログ作成者) の補足)

II 人間性を破壊する両性具有 (アンドロジナス) 信仰

ここからは、難解な思想論・哲学論は極力回避します。

主として、男性から男性性 (男らしさ) の解体、女性から女性性 (女らしさ) の解体を目指し、子供たちが性差の区別のない「新しい人間」= 「両性具有 (アンドロジナス)」に改造される時代を妄想する、第三期フェミニズムのイデオログである E・バダンテールEdith E. E. Baderの著書『男は女 女は男』、筑摩書房から彼女 (彼) の主要な主張をいくつか引用するに留めます。

彼女の直接の主張のみから、「フェミニズム」、「フェミニスト (著者) の人格」、「フェミニスト (著者) のいう男女平等思想」、「フェミニスト (著者) の理想である両性具有 (アンドロジナス)」・・・等々の本質・本性を直接で掴んで下さい。

そこから、日本国で「ジェンダー・フリー教育」を継続した場合、著者 E・バダンテール自身のような「新しい人間」が多く生まれてくることが、日本国や日本国民の将来にとって望ましいことか否かを判断してください。

【E・バダンテール『男は女 女は男』、筑摩書房から】

■ フェミニズムの本質 1

中絶の合法化は、生殖について女性を絶対的地位に押し上げた？

「中絶の合法化は、結果として女性に生殖の独占権を与えてしまった。」(E・バダンテール『男は女 女は男』、筑摩書房、202 頁)

「生まれてくる子どもよりも、父親よりも女性の方が優位に立った。その点で中絶は避妊よりもずっと根本的に新しい倫理を生みだした。胎児の権利よりも、父親の権利よりも、女性の権利が優先する。」(同、202 頁)

■ フェミニズムの本質 2

親に対する不敬と蔑視。

両親の子供への愛情は一切無視して、親は子供に従えばよい？

「結婚に対する新しい見方によれば、結婚は宗教的なものでもなければ、社会的、経済的なものでもない。結婚はまず私的なことであって、二人だけの問題である。ふたりが属している家族の問題でさえもないのだ。

・・・結婚相手を選ぶにあたって、両親の意向はしだいに問題にならなくなった。

《新しい結婚のモデルは二人の自立ということを信条として掲げた。親の口出しは、どんな形でも個人の自由の侵害とみなされる。

同棲はこういう傾向の続きであって、変化を強調しているにすぎない。

今日では結婚か同棲かの選択についても、親は排除されている。両親はもう結婚を強制することはできない。ただ退き、そして従わねばならない」(同、207～208頁)

■ フェミニズムの本質3

フェミニストの単なる持論(物事の一面の見方)の一般論化(社会全体の共通認識だ)という虚構宣伝(=マルクス主義の常套手段)。

男性は、「女性にない男性だけの特徴が何だろうか？」などという馬鹿げた自問など、かつて一度もしたことはない。

「いまのところ、動かしがたい岩のごとく残っている男女の相違はただひとつ、子どもを産むのは女性であって、その逆は決してないということである。

母であるということが女性に残された断固たるしるしであるとしたら、男性のしるしは一体何だろうと、男たちは自問を始めた。

女性にない、男性だけの特性として、何が残されているだろうか？

・・・今日女性たちは(避妊や中絶などによって)生殖を自分で制御できるようになり、産むか産まないかの決定権は実質的に女性の手に渡った。」(同、216～217頁、()内：私(=ブログ作成者)の補足)

■ フェミニズムの本質4

E・バダンテールの男女平等の完成=究極目的(終着駅)とは、男性性と女性性を喪失した人間の性的欲望の変化、つまり、「男女間恋愛」が極小化し、「同性愛」・「近親相姦愛」などが一般化した、異常社会への変革のようだ。

「今実現されつつある男女平等は、ますます男と女を類似させ、男女間の戦

争を終わらせる。

それぞれが主人公となり、人間性の《すべて》がほしいと願う。

そうすれば、自分とそっくりの分身となった《もう一つの性》をもっと理解することができる。

突然変異体（＝性差がほとんど消滅して類似化・同一化した男性あるいは女性）であるこのカップルを結びつけている（男女間の恋愛という情熱や欲望の）感情は性質を変えざるを得ない。

未知の者どうしという感情は消え、「親近感」がとってかわる。そこで私たちは情熱や欲望をちょっぴり失うだろうが、やさしさと深い合意が得られるだろう。

つまり、母と子、兄と妹、姉と弟・・・といった同じ家族を構成する者、つまり戦いをやめた者どうしを結びつける感情を手に入れるのだ。」（同、218 頁、（ ）内：私（＝ブログ作成者）の補足）

■ フェミニズムの本質5

医学（例えば脳科学など）の真に学術的な成果を無視・隠蔽し、心理学・精神分析学の証明不能な見解のみを恣意的に引用し、それが科学・真理であるかのごとく偽装する。

これが、マルクス主義フェミニズム+ポスト・モダン思想の混合したフェミニズム（＝「第三期フェミニズム」中川八洋／渡部昇一『教育を救う保守の哲学』、徳間書店、123 頁など）アジ・プロ工作であり、日本国民は決して「虚構」に騙されてはならない！

「社会的基準が消失し、性別役割があやふやになり、女性が母親にならないことを選べるようになった今、一方の性ともう一方の性を明確に定めることはしだいに難しくなっている。

・・・男と女の染色体が違うのは動かしがたいが、それ以外は、男と女の違いは（男性ホルモン、女性ホルモンの）量の差にすぎなくなった。」（同、220 頁）

「生殖細胞を決定する遺伝物質によって、男女ははっきりと識別される。しかし、精神病理学や身体病理学、それに反陰陽のさまざまなケースをみれば、・・・中間タイプがあることを認めざるを得ない。

そのためポーリュー博士は《二性分化においては、そもそも類似したものが分化するのであり、ある種の可塑性がある》と考えた。つまり、《男性と女性のあいだには、越えることのできない境界線などない》のである。」（同、220 頁）

☆ F・A・ハイエクの「フロイト精神分析学」に対する見解
それは---科学的誤謬による不可欠な価値の破壊---にすぎない

「論理実証学（価値相対主義）は、あらゆる道徳的価値が《意味を欠いた》、純粹に《情緒的》なものであることを立証しようとしてきた。

・・・知識社会学も、・・・あらゆる道徳的見解がその擁護者たちの欲深い動機によって吹き込まれたものだ」と主張することによって、これらの意見の信用を失墜させようとしている。」（ハイエク全集『法と立法と自由（Ⅲ）「自由人の政治的秩序」』、春秋社、236～237頁）

「教育に対する深い影響力を通じて、ジークムント・フロイトはおそらく文化の最大の破壊者となった。

晩年、『文明とその不満』において、彼は自分の教育の結果の一部によって少なからぬ動揺を受けたように思われるが、文化的に獲得された抑圧を取り除き、自然の欲動を開放するという彼の基本的な狙いは、あらゆる文明の基礎に対するもっとも致命的な攻撃を開始した。

その運動は30年前に全盛を極め、その後成長した世代は、主としてその理論に基づいて教育されてきた。

私は当時のものから、その基本的な考えについて、後に世界保健機構の事務総長になった、ある有力なカナダの精神科医がとくに露骨に表現したものを一つだけ示しておく。

・・・《幼児教育の基礎であった正邪の概念の根絶、老人たちの確信するものを信頼する代わりに、知的・理性的な思考をもってくること、〔…その後〕大部分の精神科医と心理学者、およびその他多くの尊敬すべき人びとはこれらの道徳的な拘束から逃れ、自由に観察し、思考することができる》

彼の考えによれば、人間を《不具にする善悪という重荷》と《正邪という厄介な概念》から人類を開放し、また、それによって、人類の近い未来を決定するのは、精神科医の任務であった。

・・・自分が決して学習したことのないものとは相容れない（＝知的・理性的に学習したこと以外のことは許容できない）と主張し、《反文化》の構築を企てさえするような教化されていない野蛮人は文化の荷を伝えることができず、しかも野蛮人の本能である自然の本能に頼る甘えの教育の必然的な産物である。」（ハイエク全集『法と立法と自由（Ⅲ）「自由人の政治的秩序」』、春秋社、238頁、（ ）内：著者、（ ）内：私（＝ブログ作成者））

「もし我々の文明が生き残る（それはこれらの誤りを捨て去る場合のみ可能

である) ならば、私は主としてカール・マルクスとジークムント・フロイトの名前と結び付けられている我々の時代を迷信の時代として、人びとが回想するだろうと信じている。

私は人びとが次のことを発見するだろうと信じている。

すなわち、非常に広い範囲にわたって跋扈し、20 世紀を支配した考え、すなわち正しい分配をとらなう計画経済、抑圧や因襲的伝統からの我々の解放、自由への道としての甘えの教育、そして市場の代わりに強制権力を有する団体による理性的調整をもってくることという考えはすべて、言葉の厳密な意味において迷信にもとづいていたということである。

迷信の時代とは、人びとが、自ら知る以上のものを知っていると考える時代である。

この意味で、たしかに 20 世紀は顕著な迷信の時代であった。」(ハイエク全集『法と立法と自由(Ⅲ)「自由人の政治的秩序』、春秋社、238 頁、() 内：著者)

■ フェミニズムの本質6

E・バダンテールによれば、フェミニストの掲げる「男女平等」は「テロ行為や戦争行為の平等」も正当化する? ようだ。

このように歪んだ男女平等思想は、男性女性の双方を夫婦(家族)生活の安寧と幸福に導くことはできず、常に口論・喧嘩・暴力という不幸と苦悩しかない最悪の人生に人々を導くだろう。

著者にとっては、そういった場合には、すぐ契約解除すれば済むことらしい。

「戦争について考えが変わった理由は、それが日常の経験よりは想像の世界に根ざしているというところにある。

・・・死をもたらすこの活動には、女性の参加もさまたげない。現代ではどの軍隊でも女性を隊員として組み入れている。

女性が直接敵と対峙することは想定されていない(なぜ女性だけ?) が、私たちが思い浮かべるのは軍服に身をつつみ、武器を手に男性と同じ歩調で分列行進をする女性の姿である。

彼女たちの女らしさは影をひそめ、男性の同僚と外見はほとんど変わらない。」(E・バダンテール『男は女 女は男』、筑摩書房、226 頁、() 内：私(=ブログ作成者))

「(19) 70 年代には、・・・テロリスト運動に多くの女性たちが加担していた

ことに人々は非常に驚いた。

《西ドイツ赤軍派》(バーダー・マインホフ・グループ)では50%、イタリアの《赤い旅団》でもだいたい同じくらいの割合で女性が参加していた。

これらの(赤色の)女性たちは・・・極悪非道の刻印を押されて非難をあげたが、彼女たちは共同体の想像世界に強い印象を与えた。

共同体全体はこうした女性たちのイメージや人格を嫌悪の念をもって排斥したが、この若い女性たちは---大多数が裕福な階級の出身である(=悪人はブルジョワジーである?!マルクス主義)---死と暴力への欲望は男性だけの特質ではないという恐ろしい証明をしてくれた。

女性は最もおぞましい行動を行うことができるし、容赦なく憐みもせず、拷問したり殺戮したりできる。

・・・女性が武器を取るわけはさまざまであっても、伝統的な女性のイメージをぶち壊すような攻撃性を、女性が秘めていることは今日認められた。

いつの時代にも女性の殺人者はいたではないかという反論に対しては、今のところ次のように言うことができるだろう。いまや女性は組織された戦争に参加したり、男性と同じような確信をもって手榴弾を投げることができる。」(同、226~227頁、()内:私(=ブログ作成者))

■ フェミニズムの本質7

著者の驚愕の男女平等論!

核兵器の犠牲者になる男女平等?

死刑執行人になる男女平等?

核戦争開始のボタンを押す男女平等?

伝統的道德(美德)、真・善・美の絶対価値観を喪失したフェミニズム思想の男女平等とは、偽善の腐敗臭が漂う墮落思想にすぎない!

「こうした(女性の)イメージが引き起こす恐怖を押し隠そうとすることはできるかもしれないが、もはやこれを消し去ることはできない。

世界核戦争の脅威は、性別役割のあいまいさをさらに強調する。

核戦争が起こった場合を想定してみよう。そこには戦士の出番はない。男も女も防衛手段を何一つ持たないまま、ただちに犠牲者になってしまう。もう勇気も力も粘り強さも何の役にもたたない。原子爆弾を前にしては、男女の性差などは何の意味もない(=男女平等である)。

男も女も犠牲者になりうるが、また同時にどちらも死刑執行人になりうる(=男女平等である)。

ボタンを押して核戦争を開始させるのに、性は関係がない(=男女平等であ

る)。」(同、227~228頁、()内：私 (=ブログ作成者))

■ フェミニズムの本質8

単に、伝統的な男女の性差を口にする人間に対して、その発言の主旨や内容も詳細に吟味せず、「セクシスト」・「差別論者」とレッテルを張り、絶叫して非難を浴びせ、彼の社会的地位・名誉・人格を貶め、言論・思想の自由を封殺して批判できなくするような思想・やり方が、フェミニストの掲げる「男女平等主義」なのだろうか？

フェミニストの男女平等の本性は、極めて怪しくなってきた。

「(19) 70年代のフェミニズム運動は世界をこのように(性の分離と差異によって)分割することに終止符を打とうとした。彼女たちの組織された行動もさることながら、舌鋒鋭い議論も重要であった。

性的差異は直接的な問題とはされず(=中味はほとんど吟味されず)、《セクシスト》と《差別論者》という二つの新しい侮蔑の言葉が、性差別(区別)を擁護する人々に対して投げつけられた(=レッテル貼りされた)。

それは、《人種的偏見》と《人種差別》と同じほど重たい道義上の告発に値するものであった。」(同、234頁、()内：私 (=ブログ作成者))

■ フェミニズムの本質9

古代の両性具有(アンドロジナス)神話を持ち出し、神話の中の神ゼウスの御業を歪曲して伝統的価値観を拒否・否定し、フェミニズムの夢想するアンドロジナス(両性具有)が「新しい人」の理想の姿であるとする著者は果たして正常だろうか？フェミニズムとは、「男女平等主義」ではなく、傲慢不遜な「無神論主義」かつ「女性の権利至上主義」にすぎないのではないか？

「両性具有(アンドロジナス)とは、自分の性ではない性の特徴もあわせもつ個体である。

・・・実は私たち全員が両性具有(アンドロジナス)である。なぜなら多くの面で、そしてさまざまな度合いで人間は両性的であるからである。私たちの中には男性的なものや女性的なものが絡み合っている。

・・・個人の開化は自らの両性性を認識することから始まるということは、今日ではおおいに認められている(??)。

・・・人間の二元性を最もよく示す例は、昔からプラトンの『饗宴』の中でアリストファネスが報告している両性具有（アンドロジナス）の神話である。

・・・アリストファネスによると両性具有（アンドロジナス）は、一方は全く女性的、もう一方はまったく男性的、というように異質な二つの半分からできており、それが中央で結合していた。ゼウスはそれを半分に分け、補完し合う別々の二種類の人間（＝男性と女性）として生まれ変わらせた。二元的性質は失われてしまった。

（伝統的な補完性モデルではなく）類似性のモデルを使うとこれとは違った解釈ができる。切り離された二つの部分は（神、ゼウスが間違っていて、）異質ではなかったのではないか、つまり二つの部分がどちらも男性と女性の混合物だったのではないかと想定することができる（＝著者はそのように想像する）。

・・・両性具有を切り分けて生まれてきたのは、（神　ゼウスの勘違いか、斬り損ねなどによって、）質的に異なった二人の間ではなく、（実は）もとの両性具有のひきうつしである二人の両性具有だったのではないだろうか（＝著者はそのように想像する）。」（同、241～242頁、（ ）内：私（＝ブログ作成者））

■ フェミニズムの本質 10

E・バダンテールは男性を見下げて言う。

女性は「子どもを出産する」という女性のアイデンティティーをもっているが、今日にいたって男性は、フェミニズムの男女平等思想によって、文明社会での伝統的役割の多くを女性に譲り渡すこととなり、男性のアイデンティティー（男らしさと役割）をすべて喪失してしまったのだという。逆に、そういった理由から、これまでの文明社会の伝統・慣習や制度は、男性が「男らしさ」という満足（優越）を得られるように父権的に造られてきたのだ、という。

どうやら、著者の主張をよく聞くとフェミニズムの根底には「男女平等思想」など上辺の綺麗ごとにはすぎず、本心は女性による男性へのスーパー蔑視主義あるいはスーパー優越主義にすぎないようだ。

「女の子は自分の女性性が、やがて出産によって頂点に達するということを知っている（子供を出産できるのは女性だけだから）。

ところが男の子はいつまでたってもこのように明確な確信をもつことはない。生殖における男性の役割は、単に首尾よい性交という程度のものである。

だから、生物学的知識は進歩をしても、父性というものは、あいかわらず疑わしいままである。

こうした理由からミードは次のように言っている。

《文明がかかえる永遠の問題は、男の役割とは何かということをもつゆくように定義することである。男性が人生の中で重大なことをなし遂げたという確固とした感情を持てるようにすることである。》

そのために大部分の社会では、女性には禁じられた権利や、女性が参加できない活動を作りあげてきた。

それは男性たちに男らしさの傲りと、重大なことをなし遂げたという感情からくる平和な気持ちをもたらした。」(同、251～252頁、()内：私 (=ブログ作成者))

「男性たちは、何よりも生殖の決定権以外はすべて女性たちと《半分こ》にすることをずっと認め続けるだろうか。

単に類似という平等主義的理想のために、男性たちはいっさいの伝統的な特性を失っただけでなく、避妊法が発見されたために男性は客観的に見れば、下の地位に置かれることになった。

男性が子どもを欲しがっても、相手の女性が産みたがらないのであれば、男のほうが女に従わなければならない」(同、312頁)

■ フェミニズムの本質 11

フェミニストのジェンダー論やセクシュアリティ論は、脳科学の知見である、脳の性差について言及しないし、理論的整合化から逃避する。

だが、良識ある人間は、男女には先天的に脳の性差があるという生物学・医学(脳科学)の学術的知見を重視すべきである。

また、J・マナーの報告は虚偽と判明し、破綻している。

その真相の経過は、『ブレンダと呼ばれた少年』に公開されている。

「アイデンティティーの感情を決定したのは、この子どもたちの性(生物学的な)ではなく、生れてから子供たちが生きた経験であるということになる。

社会が権威的・恣意的に、男とか女とかのレッテルを幼児に張りつけることからその過程は始まる。

こうしたことから、生物学的な《セックス》と心理的所作に関係のある《ジェンダー》を区別する必要が生まれた。」(同、261頁、()内：著者)

「マナーとストーラーの研究によって・・・確認されたことは、性の方向決定においては心理的要因が優位に立つということである。

つまりそれは、解剖学的きめつけに異議申し立てを行っているのだ。

アイデンティティーの感情は本質的には文化によって決定される。

生まれてからのちに学ぶものなのだ。

・・・赤ん坊が自分は男の性を有し、やがて男性になるのだということを知るのは、何か先天的な力が働くからではない。

両親が教えるのだ。しかも両親はまったく反対のことを教えることもできるだろう。

・・・たいていのケースでは、社会が男性らしさと見なしていることが奨励される。

こうして一歳の終り頃には、男の子のふるまいははっきりと男性的である」
(同、261～262 頁)

■ フェミニズムの本質の中の本質

フェミニストの本質の中の本質を知るためには、フェミニズムという思想のイデオログである著者 E・バダンテールの人格を文明社会の伝統的な「真・善・美」という価値基準で冷静に眺めるのが良い。

すなわち、「ジェンダー・フリー教育」を受けて育った子供たちの人格は、「両性具有（アンドロジナス）」を狂信する E・バダンテールの人格と類似的になるという単純明快な帰結を知るべきである。

【結婚に対する軽薄な態度】

「相手に無関心になったり、約束を守らなかったり、喧嘩をしたりすれば、カップルは分裂し、続けるかどうかが問題となる。すでに心が一体でないのなら、二人一緒にいて何になるだろうか？心と心の交流がなくなり、沈黙が居座るようになれば、二人でいる理由はなくなったのだから、カップルは消滅する。・・・私たちが理想とする親密な結びつきは、私たちが両性具有（アンドロジナス）的变化を遂げたために、ますます困難になった。」(同、276～277 頁)

【フェミニストの超己主義的本性】

「私たち（フェミニスト）の両性具有（アンドロジナス）的な性質が噴出してきたために、私たちの願い事や欲望は増加した。

私たちは自分を（両性具有的）全体と考えているので、すべてを求める。私たち（フェミニスト）は人間性の全体を代表する見本であるという気持ちを多少ともはっきり抱いている。神聖なる全体性の代用品というわけだ。」(同、278 頁)

「禁欲主義はもう存在しないし、運命に従うことも美德ではない。・・・もし不満の原因が他者であるなら別れる。自分の個性の一部を抑圧するくらいなら、自分の自我を磨くほうがいい。ありのままの自分を愛してもらおうすべがなくとも、そのかわり自分自身をいつでも情熱的に愛する準備ができています。」(同、279頁)

「(かつては)《私》よりも《他者》のほうが大切なのだという意識をせひとも示す必要があった。

新しい世代にとっては、こうした道德あるいは偽善は不要だ。彼らが熱中するのは《他者》を開拓することよりも、自分自身を最大限に開拓することである。

目的が根本的に変わってしまった。彼らは自分の時間を運営し、能力をフルに使い切ることにしか考えない。

潜在能力を未開発のままにしておくということは、自我の新しい資本主義に反する許し難い罪である」(同、279頁)

「いまは遠慮や謙遜をよそおう時ではない。無能と意欲の減退は、不幸で《自己閉鎖的》な自我のせいなのだから、自我に耳を傾け、見つめ、解剖することによって自我を解放しなければならない。

《私》こそ崇拜し、そして鍛錬しなければならない対象である。なぜなら、私たちは自我にすべてを賭けているからである。ほかの何よりも誰よりも《私》こそが、喜び、幸福、光栄、そして永遠までも与えてくれるはずだ。

だから私たちの最高の野心は、人に羨ましがられ、賞賛される自我の傑作を作りあげることである。」(同、280頁)

「(今日、伝統的道德は消え去り、)自分を愛することが倫理的なのであるから、自我は道德的価値を帯びる。

絶対的な要請は《私》と《他者》の関係ではなく、私自身に対する私の関係である。

それは自身を愛し、《開花させ》、《享受》することを命ずる。

道德の目的は他者から自己に移行した。

《相互性よりも自己の真実性、他者の認識よりも自己の認識が優位をしめる》。」(同、280頁)

「長いあいだ愛のモデルを具現していたのは献身的な愛であったが、それには決定的な限界がある。

夫婦関係はもちろん、母子関係でさえこのことが観察される。かつて母性は献身と犠牲という言葉によって定義されていた。

・・・子供が幸福になるためには、母親はわが身どころか命までも子どもに与えることが絶対に必要であるとされてきた。

今日の私たちの社会では母性についてこのような考え方は通用しない。まず子どもを産むのは、個人的欲望を満足させるためである。

・・・人が子どもを産むのは何よりも自分のためである。

自我を満足させ、豊かにするために産む。正直に言えば、子どもを欲しがる気持ちは利己主義的でナルシスト的であると認めざるを得ない。

この二つの感情が種の存続を他の何よりも保障している。

私たちが子どもをつくるのは、私たち自身を再生産（生殖）し、私の一部である子どもという他者のなかに、私たち自身を見て賞賛するためなのだ。」（同、282頁）

「今日では母親は子どもに向かって《それはゆきすぎだ、私の愛につけこんでいる》とはっきりと抗議することができる。

クリスティアーヌ・コランジュは、『あなたの母親であるわたし』という本のなかで、・・・主張した。

《私たち母親はあなたたち子どもに心からすべての愛を注ぎます。

ただし、あなたがたが十分にそれを返してくれるという条件付きです。

あなたたちが私たちに愛情を感じてくれているという、はっきりした証がなければ、私たちはあなたたちに愛情を注ぐのをやめます。

そうすればあなたたちがつれない態度をとっても苦しまなくてもすみますから》ということである。」（同、284～285頁）

【フェミニストの狂気---将来男性は出産できる両性具有になる！】

「（男性たちが）女性たちから母親の権力を奪う方法がもう一つある。

それはものの考え方、特に男性たちの考え方の信じがたいほどの変革を伴う。

それは男性の妊娠の可能性である。

妄想か SF だと笑われるだろうか。しかしおそらくそのどちらでもない。

フランスで最初に試験管ベビーを最高責任者として扱った二人の医師はすでに、男性は子どもを産めないという考え方に疑義をさしはさんだ。

1985年4月、ある女性誌の中でジャーナリストのミシェル・マンソーが《男性の妊娠は本当に可能か》と質問したのに対し、ルネ・フリードマン教授は率直に答えた。

《二年前はあり得ないと考えていた。しかし今はもう正直言ってわからない。》

数カ月後には、このアマンディーヌ（フランスで生まれた最初の試験管ベビーの名前）の父親ははっきりと肯定的態度を示した。

別の雑誌の同じ質問に対して彼はこう答えている。

《技術的には可能だ。男の妊娠の神話は今日実現するかもしれない。》（同、314～315 頁）

「ある種の生物はかつて生態的变化に順応することができずに消滅したが、別の生物が出現し、そのたびに世界の終末の神話が否定されてきた。

近い将来人類は---科学の発見のおかげで---もっとラジカルな変化の手段を自身のものにすることができるであろう。

《人間》は滅びるのだろうか？

いや新しい《人間》の誕生である。」（同、318 頁）

Ⅲ 「脳の性差」に関して得られている医学的知見

「人間の脳は、他の哺乳類もそうだが、男性と女性とでは明確な性差がある。

この脳の性差は、制度的・社会的に形成しようがないから、制度的社会的に性差が形成されるという、ジェンダー論の虚構性は、一瞬のうちに暴かれ粉砕される。」（中川八洋・渡部昇一『教育を救う保守の哲学「教育思想の禍毒から日本を守れ」』、徳間書店、136 頁）

ここに、今日得られている「脳の性差」に関する科学的知見を、新井康允（順天堂大学名誉教授、以下敬称略）著『脳科学は「愛と性の正体」をここまで解いた』、河出書房新社などから引用し紹介しておく。

☆ 脳の性分化を決定するアンドロゲンの作用

「男の脳と女の脳が分化するのは、胎児期に受けたアンドロゲンの働きによる。胎児期にアンドロゲンのレベルが上昇すると、胎児の男性化が起こり、減少すると女性化が起こる。

胎児期のアンドロゲンは、脳や生殖器ばかりでなく、ほかの体の部分にも影響をおよぼすと考えられる」（新井康允『脳科学は「愛と性の正体」をここまで解いた』、河出書房新社、114～115 頁）

☆ アンドロゲンシャワーの作用

「ラットなどの多くの動物実験において、周生期（胎児期から乳児期まで）の精巣から分泌されるアンドロゲンが、性行動や性的志向の決めてとなることが知られている。

雌ラットに生後 1 週間以内にアンドロゲンを注射すると、成熟してからも遺伝的に雌でありながら性周期がなくなり、雌の性行動を示さず、雄の性行動を示すようになる。

一方、ラットの精巣を出生時に摘出すると、遺伝的に雄でありながら性行動パターンが雌化し、雄の性行動を示さなくなる。

このことから、生まれたときにはラットの脳は未分化で、雄の脳にも雌の脳にもなりうる状態にあり、この時期に精巣から分泌されるアンドロゲンが脳に働くことによって脳の性分化が起ることが解る。

・・・脳の性分化の臨界期は、動物の種類によって異なる。

・・・ヒトでは実験不可能なので、臨界期は不明であるが、ヒトの胎児の血中アンドロゲンを調べてみると、男性の胎児では妊娠 16 週目あたりをピークとして、妊娠 12 週から 22 週あたりにかけて、胎児の精巣から大量のアンドロゲンが分泌されることがわかる。

これがいわゆるアンドロゲンのシャワーである。

このシャワーにより、男性の胎児の内・外性器の分化発達だけでなく、脳の男性化が起こるのだろうと考えられる。」（同、148～149 頁）

☆ アンドロゲンは子供の時期の遊び方や自由画の性差に影響を与える

「アカゲザルの仔ザルで遊びのパターンを調べた研究がある。

その研究では、妊娠中の母親にアンドロゲンを注射すると、胎盤を通して胎仔に作用し、その母親から生まれた雌の仔ザルの遊びパターンが雄の仔ザルのパターンを示すようになることが報告されている。

このことは、アカゲザルの遊びのパターンの雌雄差は、遺伝的に決まっているのではなく、胎児期にアンドロゲンに脳がさらされることによって決まり、生後のサルの社会からの影響によって決まるものでもないことを示している。」（同、157 頁）

「幼児の自由画には、モチーフ、色彩、構図、表現などに男女差が見られる。男の子は自動車や電車など動くものを好んで描き、色彩は寒色系で、構図は 3

次元的なものが見られる。

一方、女の子の絵は 2 次元的で、人物、草花、家など並列的に、同一平面上に描くのが特徴的である。

胎児期から副腎性のアンドロゲンが過剰に分泌される先天性副腎過形成 (CAH) という遺伝疾患があり、この病気の女の子の絵は男性化傾向が極めて強い。

このことから、幼児の自由画の男女差の成因に胎児期のアンドロゲンが関与している可能性が考えられる。」(新井康允「幼児の自由画の男女差とアンドロゲン」人間総合科学 創刊号、2001 年 3 月)

☆ J・マネーの虚偽報告から得られる知見

「J・モネ (マネー) と A・エアハルトが報告した一卵性双生児のケースで、双子のひとりが包茎の輪切手術の事故でペニスを損傷してしまい、この子はその後去勢されて、女子としての再手術を受け、両親に女の子として育てられた。

モネ (マネー) とエアハルトは《母親はこの子について、遺伝的に同一 (= 男性) の兄よりも色々な点で、はるかに女らしい》と述べたと報告している。

この症例はジェンダー・アイデンティティー (= 「性自認」) に対する環境因子 (= 後天的な社会的・文化的教育など) の影響の重要性の証拠を示すものとして、教科書に載った。

しかし、結局、(マネーの報告は虚偽であったことが判明し、) 男児は女性として適応できずに、性の再認定が賢明な決断ということになり (= 女性として育てられたが、自己を男性と自認していたということ)、女性から男性へとジェンダー・アイデンティティーを変えることになってしまった。

このケースで、女性として育てられたのに、結局、男性のジェンダー・アイデンティティーを選ぶ (= 性自認する) ということは、胎児期にアンドロゲンによって脳が男性化していることを示す。

その場合には、思春期にジェンダー・アイデンティティーを再自認する際、今までの女性としての養育効果 (= 後天的な社会的・文化的教育など) はすべて無効になることを示唆している。

ジェンダー・アイデンティティー (性自認) は社会的な影響は受けることは当然であるが、基本的には胎児期のアンドロゲンの影響であることを示しているのだ。」(同、179 頁、() 内：私 (= ブログ作成者))

IV 教育は真正の保守主義で再建せよ！

① バーク保守主義者 M・サッチャー、R・レーガンの保守主義に学べ

「サッチャー首相は国を立て直すにあたって、三つのことを指摘しています。第一が、《教育の正常化》です。

やはり教育は次の世代の《国民》を育てる国家的な事業であるという認識です。

二番目は、彼女の言葉ですが、《伝統的な家族の強化》。

伝統的というのは両親がそろった家族のことを言っています。

《家族の多様化》ではなく、家族の基礎、基本をしっかりと認識させ…るということなのです。

三番目は、《国民道徳の再生》です。

彼女の言葉を借りれば、これは《ビクトリア的美徳》という。

かつて当たり前であった、自助や努力、勤勉や真面目ということ、そうした基本的な道徳（美徳）をもう一回しっかりと再認識させると言っています。

《教育の正常化》《家族の強化》《国民道徳の再生》という三つは、…保守主義の基本的なテーマ…でレーガン大統領もそうでした。

…明日の国民をどうするかという、（過去—現在—未来を繋げる）《縦軸》となる部分（政策）こそが保守政治家の認識すべき大きなテーマ…です。」（八木秀次編『教育黒書「学校はわが子に何を教えているのか」』、PHP、210頁）

② 美徳と背反する極左思想から子供と教育を守る政治を！

【中川八洋・渡部昇一『教育を救う保守の哲学「教育思想の禍毒から日本を守れ」』、徳間書店から】

日本のフェミニストの多くがつかう gender（ジェンダー）という概念や用語は、主としてマナーの『Man & Woman Boy & Girl』（1972年）や『Sexual Signatures（性の署名）』に依拠したものである。

マナーは、これらの著書で、sex と gender を次のように定義した。

Sex = 「医学的・生物学的な性」

Gender = 「社会的・文化的に形成された性」

しかし、余りにも杜撰な思い付き定義である。

まず第一に、このように性を二分類するのは、Gender とは無縁な 99.9% 以上の人間にとっては不適當である。

第二に、0.1% 以下の性同一性障害者らにとってすら、「後天的な性」「制度や慣習によって社会的に形成された性」という意味の gender（ジェンダー）が果たして存在するかと言えば、実は疑わしい。

いや、そのようなことは仮説にすらならない。

例えば、女性の性器を持つが故に「女性」で生まれた子供が大人に成長するにつれ、自らの性を「男性」と認識し、そう確信していくケースにおいて、この成長過程における性の自己認識の変化は、親や学校の教育・躾によって社会的・後天的に形成された、というジェンダー論を裏付ける、いかなる科学的根拠も存在しないからである。

・・・男性と女性の性分化 (sexual differentiation) は、99.9%以上の人間にとって生まれたとともに定まっている。

「運命の性別 (性の分化) である (→脳科学の知見)。

そして、0.1%以下の性同一性障害者らの、この性分化の乱れの発生の発生もまた、生れたときに定まっている。(→脳科学の知見)

社会的制度や慣習によって後天的に発生したのではない。(→脳科学の知見)

フェミニストたちは、実在しない gender をもって、さも実在するかに見せるマジックの方法を模索した。

それが「セクシュアリティ (性的欲望)」を権力と知との枠組みをもって把握するフーコー理論などの活用であった。

フーコーに従えば、科学的真理はこの世に存在しないから、「権力」による言説 (知) をもって gender を実在するものとすれば実在することになる。

かくして、日本では学校の教室で教師の権限で、つまりいわゆる「権力」によって、「幻覚」上の gender を「真理」だと子供たちに強制することにしたのである。

そして同時にこの gender を転倒して「ジェンダー・フリー」をつくって、これを教育の場で子供たちをカルト宗教的に洗脳しようとするのが、「ジェンダー・フリー教育」である。

すなわち、「ジェンダー・フリー教育」とは、正常な子供たちに対しての性同一性障害者の治療法適用であるから、彼らの正常な (生まれた時に定まっている) 性自己認識 (sex identity) は攪乱される。

・・・「ジェンダー・フリー教育」を受けた子供たちによって創られる未来の日本とは、偽が真に、悪が善に、醜が美になった転倒の社会である。

真偽／善悪／美醜の区別をしない、(ソ連のような) 共産社会と同じ社会である。

いや実際には、それ以下であろう。

社会も人間も根本から転倒し狂気に浮遊し腐敗する、砂漠の光景に似た、社会の崩壊 (= 国家の滅亡) となるだろうからである。

(以上、中川八洋・渡部昇一『教育を救う保守の哲学「教育思想の禍毒から日本を守れ」』、徳間書店、138~141 頁、() 内：著者、() 内：私 (= ブロ

グ作成者)の補足)

③ “美德ある自由” 主義国家としての日本国を目指せ！

現在の日本国に最も必要なことは、フェミニズムの狂ったジェンダー・フリー教育を廃棄し、伝統的美徳教育を復活させることにある。

人間は“美しいもの”、“正しいこと”、“偉大なもの”に感動して、政治的行動をとることができる。

人間は、マルクス主義やマルクス・レーニン主義が説くように、モノやカネや性衝動（すなわち物欲・性欲など）によって支配される野獣ではない。

だからこそ、人間は（不完全なものではあるが）文明社会を築き上げることができてきたのである。

それゆえに、子供たちをモノやサービス商品と見なすようなジェンダー・フリー教育は全廃すべきである。

最後に、保守（自由）主義の名言をいくつか、掲げておこう。

「美德によって完成されるべきものとして人間の本性を与え給うた神は、その完成に必要な手段をもお与えになりました。

即ち神は国家を欲し給い、また国家があらゆる完全性の源泉であり、根源の原型であるもの（＝神の意志）と結合することを欲し給うたのです。」

「それにしても、智恵も美德も欠いた自由とは一体何なののでしょうか。

それは、およそあり得るすべての害悪の中で最大のものです。

というのも、それは教導も抑制もされない愚行、悪徳、狂気にすぎないからです。」（以上、エドモンド・バーク『フランス革命の省察』から）

「道德教育とは、子供たちの心と精神を“善”に訓育することである。

して良いこと、して悪いこと、の規範と指針を教え導くことである。」（ウィリアム・ベネット『美德の教本』から）

「自由は深くしみこんだ道德的信仰なしには決して作用しない」（フォン・ハイエク『自由の条件』から）

「人の万物の靈長たる所以は、人としての徳性を具備するにあり。

いかに俊才なるも、いかに博学なるも、善良なる道德的品性なくんば、眞の人と称し難し。されば、道德的品性を收容するは、人たるものの、まさに務む

べき道なり」(杉浦重剛「教育勅語」御進講から)

平成24年11月27日(兵庫県神戸市にて記す)

エドモンド・バークを信奉する真正保守主義者